

知的障害児のための療育活動（キッズサークル、サマースクール）

事業代表者：宇都宮大学教育学部 教授 池本喜代正

1. 事業の目的・意義

(1) 事業の意義

近年、知的障害のある子どもに対して、障害児放課後等デイサービスの利用が非常に増加している。しかし、そうした場においては指導員の数も少なく、体を動かす活動も十分でない場合が多い。また、長期休暇においてもなかなか自分自身で余暇活動を組み立てることができない。そのような知的障害児にとって学校以外の場面で他の友達と一緒に十分に体を動かす機会は、なかなかない。そこで、大学という場のリソースと学生という人的リソースを生かし、知的障害のある子どもたちの活動を保障する機会を月1回提供することは、大きな意義がある。また将来教師を希望する学生にとっては、障害のある子どもと関わることにより、障害のある子どもの理解、子どもへの適切な接し方、言葉かけや対応の仕方などを学ぶ機会となる。知的障害の子どもと学生にとっての「学びの場」として本事業は、これまで19年間継続して実施してきた。

(2) 事業の目的

参加する知的障害児にとっては、発達を支援するために、①楽しみながら体を十分に動かす、②集団への適応性を高め、注意力・集中力を育て、認知面の発達を促すことを目的としている。

ボランティアとして参加する学生にとっては、知的障害や発達障害のある子どもと実際に関わることを通して子どもの特性を把握し適切な対応方法を学ぶことを目的としている。

また、毎月の活動の裏番組として『保護者プログラム』を実施している。参加する子どもたちは、一人で大学に来ることはできないため、必ず保護者の付き添いとなっている。その保護者たちが集まって、お互いの子育てについて話をしたり、教員からの講話を聞いたりするなど、保護者の学びと仲間作りを目的としている。

2. 事業内容

本事業は、原則として毎月第4土曜日 13:30~15:30 に実施するキッズサークルと8月に4日間実施するサマースクールであり、キッズサークルの裏番組として保護者プログラムを実施している。

(1) キッズサークル（知的障害児療育活動）

キッズサークル（以下、キッズ）は、月1回宇都宮大学第2体育館にて開催しており、2018年度のキッズの活動は、以下の通りである。

1) 実施日

2018年 4月28日（土）、5月26日（土）、6月30日（土）、7月28日（土）、9月22日（土）、10月20日（土）、11月17日（土）、12月22日（土）
2019年 1月26日（土）、2月16日（土）、3月16日

（土）

1) 参加者数

キッズの対象としているのは、原則として知的障害のある児童である。自閉症スペクトラム障害を併せ有する児童も多い。今年度登録した者は、小学生21名・中学生4名である。特別支援学級在籍者は17名、特別支援学校在籍者は8名である。ここ10年ほどは特別支援学級の子どもたちの比率が高い。

子どもたちの参加者数は、月によって異なるが、大体22名から25名程度であった。また、きょうだいたちも4~5名参加している。

ボランティアは、特別支援教育専攻の学生がほとんどであるが、他専攻や他大学の学生もおり、毎月8~15名の参加があった。全体を掌握し、活動内容に助言を与えるために、現職教員や卒業生も毎回数名参加してくれている。

2) 内容

全員でリズムカルな音楽に合わせて集団の大きな流れに沿って、歩く・走る・止まる・手つなぎ歩行などの動きを行うダイナミック・リズム、ボランティア学生による音楽演奏やペープサートなどを見たり聴いたりする集会、みんなで一緒に楽しむダンスやゲーム等によって構成されている。

進行の中心となっているのは特別支援教育専攻の3年生であり、毎回事前に集まり、集会やゲームなどの内容・担当を決めたり、ペープサートなどの教材を作成したり、ダンスの振り付けを考えたり、ハンドベルやリコーダーなど演奏の練習をするなどの教材準備を行っている。知的障害児や自閉症児の特性を考えて、教材作成を行っており、音楽や視覚的な教材を多く取り入れている。

キッズは、6つのグループごとに、学生担当（グループ・リーダー）が配置され、各内容の担当者リーダーが順序よく交代しながら全体指示を出して進行している。主な活動内容は、ダイナミックリズム、集会（パネルシアター、手遊び歌、ハンドベル、動作模倣など）、リトミック、ゲーム、ダンスで構成されている。

障害が重く、多くの支援が必要な子どもに関しては個別的な支援を行うようにしている。活動の一部の様子を写真で示す。

参加する子ども達は当然保護者の付き添いで通ってくるわけであるが、保護者は子ども達の活動を見学することも自由であるが、キッズの裏番組として「保護者プログラム」として月ごとにテーマを設けて話し合いや学習会を行っている。講師としては、大学教員、小学校教員（特別支援学級担任）、福祉関係者など多様である。保護者プログラムのテーマは、就学に当たっての教育支援の在り方、アサーショントレーニング、絵本に見る障害児、ソーシャルスキルトレーニング、自閉症に関するビデオ視聴などである。



写真1 クリスマス会：合写真



写真2 ダンスの様子

を得て、宇都宮市城山地区市民センターで実施した。

内容は、1日目・3日目の午前中は、朝の会、ダイナミック・リズムやゲームなどを行って体を動かし、午後はフォトフレームづくりの制作活動を行った。

2日目は、宇都宮森林公園においてハイキングを実施した。脚力に応じてグループ分けをして活動した。古賀志山の頂上まで登り、頂上で昼食をとったグループもあった。午後はダンス練習などを行った。

4日目は、午前中カレーライスとサラダなどの調理活動を行った。子どもの能力や生活年齢に合わせて調理の活動内容を変えており、子どもの実態に即した活動となっている。

そしてお別れ会、そして閉校式を行った。例年のことではあるが、子どもたちとの別れでは涙ぐむボランティアもあり、4日間の関わりの重さを感じることができた。

開催後の保護者からのアンケートでは、企画・活動に対する満足度が非常に高かった。自由記述としては、「昨年度はできなかったハイキングができてよかった。」制作の時計が素敵だった。」などの感想があった。



写真3 昼食（カレーライス）

(2) サマースクール

1) ねらい

長期休業中（夏休み）に、知的障害児のためのサマースクールを開催し、知的障害児に対する療育的活動を中心としたコミュニケーション能力・集団参加能力などを育成する。ボランティア参加の学生は、障害児と直接触れ合うことを通して、障害児に対する指導のあり方を学ぶ。

2) 期日： 2018年8月7日（火）～10日（金）

3) 参加者

今年度の参加者は、小学生17名・中学生4名の21名であった（全員4日間参加）。

事前準備も含めて企画・運営を担当する実行委員会スタッフは8名であった。ボランティアは21名、OB・OGが8名、教員3名であった（ボランティアは4日間参加の者が多いが、1～3日間参加の者もいる）。学生は、特別支援教育専攻の学生・院生が大半であるが、音楽、英語の教育学部学生、そして作新学院大学・茨城大学の学生も参加した。

4) 内容

今年もサマースクールは、宇都宮市教育委員会の後援



写真4 自由遊び（バルーン）



写真5 制作発表



写真6 制作活動

3. 事業の成果

キッズサークルは、大学における知的障害児の療育活動であり、障害のある子どもたちにとって楽しく安全に活動できる貴重な機会である。毎回参加することで、子どもたち自身も流れを理解し、見通しを持って活動に参加でき、集団としてのまとまりができています。

ボランティアとして参加している学生にとっては、子どもの前で自分達の作成した教材を提示したり、手遊び歌などをしたり、子どもたちに働きかけるという教育活動となっており、「教師としての実践力養成の場」である。毎年のものであるが、活動に参加している学生は、教員志向が高く、過去においても教員になった者の割合が非常に高い。サマースクールは、キッズサークルの延長線にあり、マンツーマンで子どもに学生がつき、障害のある子どもと一日を通して一緒に活動することによって特別支援教育への関心も高くなるという結果が出ている。アンケートからも参加して達成された項目で「障害児とかわる経験を積むこと」が最も多く、「特別支援教育に大変興味関心が深まった」にほとんどが回答している。

キッズサークルとサマースクールは、特別支援教育専攻の学生を中心に19年間継続してきた活動であり、ボランティア活動に関心がある学生が障害児の特性や子どもとの関わり方を学ぶ有効な機会となっている。指導技術、運営・企画の仕方も下の学生が上の学生から学び、引き継がれており、年々レベルアップしている。もちろん活動の主体である障害のある子どもたちにとっても、このような手厚い指導の下で体を動かすという活動は他に類を見ない活動である。



写真8 ボランティア集合写真

4. 今後の展望

今年で19年間継続してきたが、子どもの参加人数が少し減少傾向にある。おそらく障害児放課後等デイサービスを利用する子どもが増え、保護者にしてみればそちらのほうが使い勝手がいいという考えもあろう。また、学生ボランティアの数も激減している。大卒入試の影響もあろうが、アルバイトや部活の関係考えられる。ボランティア学生が減少して、これまでのやり方でキッズサークル・サマースクールを運営していくことは非常に難しい状況にあり、今年度いっぱいこれらの活動を取りあえず終了する予定である。「この活動がなくなることは非常に残念だ」という保護者の声は多く、とても忍びない思いを有している。今後、障害のある子どもたちに対して宇都宮大学生が関わりを持つ機会を検討していきたい。